第 5 回「臺日文化交流教室」

講　題 / 演　題：

臺日關係與臺灣總統—蔣介石與李登輝

日台関係と台湾総統—李登輝と蔣介石—

演講人 / 講演者：

野嶋剛

（前朝日新聞社臺北分社長）

▲野嶋剛先生

演講內容：

身爲資深媒體人的野嶋剛先生曾在臺灣留學，曾任朝日新聞社臺北分社長，並出版過許多關於臺灣的著作，是位非常瞭解臺灣的日本人。他在本次演講中以蔣介石和李登輝兩位前總統爲例，說明臺日關係的變化。

講演內容：

ジャーナリストの野嶋剛氏は、台湾留学や朝日新聞社台北支局長を務めた経験があり、台湾関連の著作も多く、台湾への理解が大変深い。今回の講演で野嶋氏は、蔣介石と李登輝の2人の総統を例に、日台関係の変化について説明した。

野嶋氏はまず、他の総統ではなく蔣介石と李登輝を講演テーマに選んだ理由について、2つの理由があると述べた。1つ目はこの2人がしばしば物議を醸してきた点である。蔣介石の銅像は228記念日の度にペンキをかけられ、また李登輝は尖閣諸島を日本の領土だと発言したことで、大きな批判を受けた。

2つ目は2人が異なる歴史観と日本観を持っている点であり、これは日台関係の変化を観察する良い切り口となる。

第５回「台日文化交流教室」

2016.03.04

野嶋先生首先提到他爲何選擇蔣介石和李登輝作爲演講題目，而非其他總統。首先，因爲這兩位最具爭議。蔣介石銅像在今年二二八紀念日遭潑漆；李登輝則主張釣魚臺是日本的，引起許多批評。再來，這兩人分別代表兩種截然不同的歷史觀和日本觀，這是觀察臺日關係變化很好的切入點。

臺灣和日本同時具有「華日」和「臺日」的兩面性，這兩股勢力的相互角力造就了臺日關係的變化。「華日」指的是中華民國與日本，以政治層面的交流爲主。代表者是蔣介石和蔣經國，他們擁有中國歷史觀，爲了慰安婦及釣魚臺，和日本爭執不休；「臺日」則是指臺灣和日本，以經濟、文化等民間交流爲主。代表者是陳水扁，他們擁有臺灣本土的歷史觀，對前

台湾と日本については「日華」と「日台」という両面があるが、双方の勢力の競争が日台関係に変化をもたらしてきた。「日華」は日本と中華民国、つまり政治的な関係を指す。代表者である蒋介石と蒋経国は中国の歴史観を持ち、慰安婦や尖閣諸島といった問題について日本と争いが絶えなかった。一方「日台」は日本と台湾を指し、経済や文化といった民間交流が中心である。その代表は陳水扁であり、彼らは台湾本土の歴史観を持ち、植民者であった日本へも親しみを抱いている。以前の日台関係は主に「日華」だったが、2000年以降「日台」が次第に台頭し始めた。2011年の東日本大震災発生後、多くの日本人が台湾人の支援に感謝し、これにより「日台」が主流となった。

蒋介石と李登輝はどちらも親日だが、親

第 5 回「臺日文化交流教室」

殖民者日本感到親近。早年的臺日關係以「華日」爲主，到了 2000 年以後，「臺日」逐漸抬頭。2011 年東日本大震災發生後，許多日本人感謝臺灣人伸出的援手，「臺日」因此成爲主流。

蔣介石和李登輝皆親日，但親日的方式有所不同。蔣介石曾到日本接受軍事教育，但他心繫於祖國的革命，未和日本進行多餘的交流。蔣介石時期的臺日關係以東西冷戰和反共爲背景，「以德報怨」和「中日合作」爲主軸，透過日本留學時期認識的人脈，接受日本「白團」的軍事協助。

李登輝出生於日治時期的臺灣，曾到日本接受高等教育，對他而言日本是個親近的對象。李登輝時期的臺日關係以冷戰

▲學生提問

日の方向性が異なる。蔣介石はかつて日本で軍事教育を受けたことがあるが、彼の心は祖国の革命にあり、日本との交流はあまりなかった。蔣介石時代の日台関係は東西冷戦と反共を背景に、「以徳報怨（徳を以て怨みに報いる）」と「日中合作」を軸として、日本留学時の人脈を介し日本の「白団」の軍事協力を受けた。

李登輝は日本統治時代の台湾に生まれ、また日本で高等教育を受けたことから、彼にとって日本は身近な存在だった。李登輝時代の日台関係は冷戦の終結と台湾民主化を背景に、両国の実質関係拡大のため、李登輝自らが日台交流を主導した。

1990年以降台湾は「本土化」を続け、これまで封印されてきた日本統治時代の記憶が再び日の目を見ることとなり、日台関係もさらに友好的になった。しかし日台間には、その関係を脅かす中国という脅威がある。野嶋氏はここ30年の日本の台湾世論を分析し、台湾本土派と民進党は思想的には左派寄りであるのに、日本の左派には受け入れられず、むしろ右派に支持されていることに気づいた。野嶋氏は、このことは

第 5 回「台日文化交流教室」

2016.03.04

結束和臺灣民主化爲背景，由李登輝本人親自主導臺日交流，主要目的在於擴大兩國實質關係。

1990 年以後，臺灣持續本土化，日治時期的記憶重見天日，臺日關係變得更加友好。但是臺日關係中隱藏著變數，那就是中國的存在。野嶋先生分析這三十年來日本有關臺灣的輿論，發現雖然臺灣本土派和民進黨在思想上較接近左派，但卻不受日本左派的歡迎，支持他們的反而是右派。野嶋先生認爲這是因爲左派親中，因此討厭臺灣；右派反中，因此支持臺灣。他也觀察到，東日本大震災後，許多日本人開始關注臺灣。他們不在意中國，純粹將臺灣視爲臺灣。野嶋先生認爲今後臺日關係若要繼續向上發展，日本必須要能不被中國左右，和臺灣一對一地往來。

今 (2016) 年的總統大選，由民進黨蔡英文當選總統；日本安倍政權的親臺政策也逐漸明朗化。臺日關係將脫離蔣介石的「華日」和李登輝的「臺日」，迎向新的時代。但臺灣只要還在中華民國體制下，「華日」便不會消失，臺日關係仍舊存在著變數。

▲學生提問

親中の左派が中国に親しいがゆえに台湾を嫌い、一方の右派が反中であるがゆえに台湾を支持していることが背景にある。また東日本大震災の後、多くの日本人が台湾に関心を持ち始めたが、彼らは中国のことは気にせず、純粋に台湾を台湾とみなしている。野嶋氏は、今後日台関係が発展し続けるならば、日本は中国に左右されず、台湾と一対一で付き合っていかなければならないとした。

今年(2016年)の総統選挙で民進党の蔡英文が当選したため、日本の安倍政権の親台政策も次第にはっきりとしたものになってくるだろう。日台関係は蒋介石の「日華」と李登輝の「日台」から抜け出し、新たな時代を迎えるだろう。しかし、台湾が中華民国体制の下にある限り、「日華」が消えることはない。ゆえに、日台関係は依然として不安要素を抱えたままなのである。

第 5 回「臺日文化交流教室」

問題與討論

當日聽衆發問非常踴躍。有位日本留學生表示他對中華航空這個名稱感到疑惑，爲何是「中華」航空，而非「臺灣」航空。有些聽衆針對演講中的內容提問，包含臺日關係友好的具體例子，戰後爲何是日軍協助臺灣，而非美軍等問題。

綜 合 回 答

陳水扁時代，曾經有去中國化的政策，但未能完全成功。名稱中有「中國」的，如「中國石油」，改名爲「台灣中油」；但名稱中有「中華」的，如「中華航空」、「中華郵政」則維持原名。

以前，擁有懷日情緒的臺灣人會被批評是皇民，但現在社會大衆對於這樣的情懷是非常包容的。

戰後美國一度捨棄了中華民國，直到韓戰爆發後，美國才又重新資助中華民國。✦

質疑応答

講演の最後には活発な質疑応答がなされた。その中で、日本人留学生は「中華航空」という名称について、「中華航空はなぜ『台湾』ではなく、『中華』なのか」と聞いた。その他には、「日台関係が良くなったことの具体例にはどのようなものがあるか」「なぜ戦後、アメリカ軍ではなく日本の軍隊が台湾援助に来たのか」といった質問が寄せられた。

総合回答

まず、「中華航空」という名称について、陳水扁時代に脱中国化政策が行われたが、完全に成功したわけではない。「中国」と名の付くもの、例えば「中国石油」は「台湾中油」と改められた。しかし中には「中華航空」や「中華郵政」といった「中華」が付く名称もあるが、これらについては元の名が継続して用いられた。それゆえ、「中華」航空なのである。

また、日台関係が良くなったことの具体例としては、以前は懐日感情を持つ台湾人は「皇民」と批判されていたが、現在は社会全体がこのような感情に対して非常に寛容的になったのである。最後、「なぜ戦後、アメリカ軍ではなく日本の軍隊が台湾援助に来たのか」という質問について、戦後アメリカは中華民国を一度は見捨てたが、朝鮮戦争勃発後、新たに中華民国への経済的援助を行った、と答えられた。✦

第 6 回「台日文化交流教室」

2016.06.03

講　題 / 演　題：

給年輕人的一席話—回顧我的臺日交流人生—

今若者に伝えたいこと—台日交流の我が人生を顧みて—

講　師 / 講演者：

彭榮次

（前亞東關係協會會長）

▲彭榮次先生

演講內容：

2016 年 6 月 3 日第六次臺日文化交流教室，日本研究中心邀請到前亞東關係協會會長彭榮次先生蒞臨演講。首先由中心副主任林立萍教授開幕致詞。彭榮次先生不僅是臺灣大學經濟系的傑出校友，更是臺日交流的

講演內容：

2016年6月3日、亜東関係協会前会長彭榮次氏をお招きし、第6回台日文化交流教室を開催した。はじめに本センター副主任の林立萍教授より開会のあいさつがあった。彭榮次氏は台湾大学経済系の卒業生であるだけでなく、日台交流を支えてきた重要な人物である。今回の講演では、ご自身の日台交流の経験をお話しいただいたほか、「好きなことを選び、その選択を信じなさい。一期一会を大切にしなさい」と、若者への激励の言葉もあった。

「十年河東、十年河西（物事は常に変化する）」、彭氏はこの表現で自身の日台交流人生を振り返った。またこの表現は、台湾の急速な変化をも表している。1940年代の台湾は、まさに日本統治から台湾光復への転換期に立っていたが、彭氏自身のアイデンティティも、この時代の変化と混乱の中にあったという。

第 6 回「臺日文化交流教室」

重要幕後推手。此次演講彭榮次先生除了分享自身臺日交流經驗之外，也鼓勵年輕人應「擇己所愛，愛己所擇」，並珍惜每一段相遇。

「十年河東，十年河西」，一開始彭先生便以這句諺語總結自己的臺日交流人生，也一語道盡臺灣急速的型態變遷。1940 年代臺灣正值日治與光復的轉捩點，彭先生說道自己的身分認同也在此時歷經錯置與混淆等階段。

1950 年代進入白色恐怖後，臺灣一片風聲鶴唳，日本明治到大正時期「把悲憤化爲美學」的自然主義文學成了彭先生的心靈救贖，也在此時點燃對日本文學的喜愛。大三時，他在因緣際會下與教育部招收的兩批日本留學生相識，這段緣份成爲他人生的轉折點，並對他往後的際遇影響甚鉅。

彭先生說道他在大學時期從法律系轉到

1950年代白色テロ時期に突入し、台湾は風声鶴唳に怯えていた。明治～大正期の、悲憤を美学とする自然主義文学は彭氏の心の救いとなり、日本文学に夢中になった。大学3年時、彭氏は縁あって台湾教育部によって招かれた2名の日本人留学生と出会った。この縁は彭氏にとって人生のターニングポイントとなり、またその後の人とのめぐり合わせにも大きく影響した。

彭氏は大学時代、法律系から経済系へ転部し、常にただ流れに身を任せてなんとなく日々を過ごしていたが、そんな中でも日本を好きな気持ちだけは変わらなかったという。

この熱意を抱いたまま、彭氏は大学卒業後、台湾初となる日本の銀行に就職した。上からの評価も高く、台湾における証券取引制度を確立した。また、日台関係もこれにともない1960年代に最高潮を迎えた。しかしその後、日台断交や台湾経済の成長、日本のバブル経

第 6 回「台日文化交流教室」

2016.06.03

經濟系，始終隨波逐流、虛無飄渺，但唯一不變的是對日本的熱愛。

秉持著這份熱情，他在大學畢業後以榜首之姿進入日本首家來臺的銀行就業，並獲上級賞識，建立臺灣證券交易制度，臺日關係隨之在 1960 年代達到巔峰。但之後隨著臺日斷交、臺灣經濟起飛、日本泡沫經濟等等大環境丕變，臺日關係風雲變色後始終停滯不前，直到 1988 年李登輝總統上任後才出現了新的轉機。

李登輝前總統期待再度開啓台日交流之窗，但卻毫無進展。此時彭先生當年深交的日本留學生當上外務省官員，他因此受李登輝前總統之託，參與體制外國民外交，爲臺日關係再開新頁，並在推動往後的臺日交流中不遺餘力，終於在 2006 年安倍當上首相後功成身退。

彭榮次先生藉由自身經歷勉勵現今年輕學子：朝著自己熱情的方向走，終能發光發熱，並教誨我們要眞誠待人，重視每一段「出会い（相遇）」。

▲學生提問

最後的討論時間，提問十分踴躍。有來賓請彭榮次先生分享臺灣高速鐵

済等の環境の大きな変化の煽りを受け日台関係も停滞したが、1988年に李登輝氏が総統に就任したことで、ようやく新たな転機を迎えた。とはいえ、李登輝前総統は日台交流の窓口を新たに設置すると期待されたが、ほとんど進展しなかった。この時、彭氏と親交の深かったかつて台湾に留学していた日本人留学生が外務省に勤めていた関係で、彭氏は李登輝前総統からの要請を受け、民間での人的交流に関わり、日台関係の新たな1ページを開いた。また、その後の日台交流の促進にも尽力し、2006年の安倍政権誕生後、第一線を退いた。

彭氏は自身の経験から学生に、「自分が熱くなれる方に向かっていけば、いつか輝ける。誠心誠意人と接し、一つ一つの「出会い」を大切にすること」と、エールをおくった。

講演後の質疑応答の際には、学生の積極的に質問する姿が見られた。「台湾高速鉄道が日本の新幹線のシステムを採用する過程についてのお話を聞きたい」、「第二次世界大戦前後で生活や立場はどう変化したか、そして自分のアイデンティティとどう向き合い順応していったのか」、「日本人と誠心誠意付き合うにはどうしたらいいのか」といった質問があがり、最後に、「現在の国際情勢の下で、台湾は日本、中国、アメリカの中でどうするべきか」という質問があった。

第 6 回「臺日文化交流教室」

路採用日本新幹線系統的過程；有學生詢問彭先生二次世界大戰前後身處環境變化，如何面對與調適自己的身分認同；「如何與日本人推心置腹的相處」等問題也被提出來；最後，在場聽衆想知道，在當今國際形勢下，臺灣在日本、中國、美國之中該如何自處。

彭榮次先生回答臺灣高速鐵路採用日本新幹線系統的過程中，情資的掌握可說是其關鍵之處，自己僅是盡了微力而已。另外，臺灣人的「identity（身分認同）」從日治時期有共通語言（日語）後開始成形，光復後加入中國文化，雖然有質的改變，但至今已慢慢成熟。有關與人相處的部分，彭先生建議我們一開始姿態不應擺太低，平起平坐、不卑不亢才能交心。在面對外交的問題時，不應參雜個人喜好，應建立雙方交流機制才是正途。✦

これらの問いに対し彭氏は、台湾高速鉄道が日本の新幹線システムを採用する中でカギとなったのは情報の掌握であり、自分にできることはほんのわずかしかなかったと答えた。また、台湾人の「アイデンティティ」は、日本統治時代に日本語という共通語を持ったことで形成され始め、統治から解放後、中国文化が入ってからも、質の変化はあったものの、今ではすでに確立されているという。人付き合いについては、「最初から控え目すぎてはならない。対等で、卑屈でもなく傲慢でもない姿勢で接することでこそ、心を通わせることができる。」、また外交問題に際しては、「個人のレベルだけなく、双方が交流のための機関や制度を確立してこそ、安定的かつ持続的な関係が構築される」、とそれぞれ回答した。

聴衆に深い感銘を与えた講演であった。✦